

『八月の光』におけるテクノロジー

ジョー・クリスマスとリーナ・グローヴが見たオルターモダニティの萌芽

藤野 功一

序

ハートとネグリは『コモンウェルス』において、「オルターモダニティ」を「アンチモダニティの伝統から出てくるものであると同時に、対立と抵抗を超えた広がりを持つという点で、アンチモダニティの通常の経路からはずれるもの」であるとし、これまでの革命の成功の歴史が結局は「近現代の関係性である階級組織のもとの力関係を再生産してしまう」との認識から、オルターモダニティは「より重要なものとして、社会的関係ないし生命の形態のネットワークスによる共有関係」を作り上げる行動様式と定義した。オルターモダニティは、単に近現代化に抵抗するだけのアンチモダニティの限界を自覚し、むしろ現代に至る経済やテクノロジーの発展と共存しながら、そこに新たな社会的関係や生命の形態のネットワークスを見出して、モダンの別のありようとその可能性を示唆する。この理論的枠組みをヒントに、フォークナーの『八月の光』におけるジョーとリーナの行動をどのように解釈できるかを考えてみたい。

1. ジョーが示すモダニティの悲劇的結末：ロケットと死の結合

まず、ジョーの死とロケットの比喩の接続によって、モダニティの発展における限界と不安が示唆されている点を確認しよう。リンチされ去勢される場面で、ジョーがロケットにたとえられる部分は印象的だが、このころまだロケットによる宇宙空間への飛行は実際に行われていないため、ここで同時代の読者が思い描くのは、近未来を描く小説や映画、科学書の中で描かれたロケットの姿だろう。この時期のロケットのイメージの代表といえば、1929年にドイツで公開され、アメリカでは1931年に公開されたラングのSF映画『月世界の女』に描かれたロケットである。ラングの映画のロケットのイメージは、同時代に強い影響を与え、ディヴィッド・ラサーの1931年の科学書『宇宙の征服』冒頭にもそのイラストが転載された。当時の文脈からみると、科学的ロケットのイメージは、希望と同時に、人間の宇宙空間での死と、人間の野蛮化への不安も強く示していたので、『八月の光』の死とロケットの比喩の不吉な接続は、奇抜というよりむしろ適切なものだろう。『月世界の女』の結末で荒涼とした月に取り残された恋人同士には、確実に死の運命が待ち受けており、また、『宇宙征服』の結論部分も、不吉な予言に満ちており、ラサーは最新式のロケットを使用した戦争の可能性を示して、ロケットが武器に転用されて国家間の紛争に利用され、再び人間を暴力的で野蛮な段階に戻す可能性を警告している。こうした文脈があるロケットを用いた比喩でその死を示されたジョーは、モダニティの果てのテクノロジーの革命による「新たな生活と思考」や「奇跡」を目指して飛翔していくロケットのイメージを裏切るかのように見えるものの、その一方で、その姿はロケットが示す未来における絶望的な生命の枯渇と野蛮な暴力化と一体化し、モダニティの発展の先にある危険性を読者に強く意識させる。

2. 電話回線ネットワークとリーナ・グローヴ

では、ジョーのモダニティの発展の危険性に代わるものとして、どのような世界観をフォークナーは提示しているのだろうか。その点を、リーナと、当時の地上における先端テクノロジーの電話回線との関係から見てみよう。1920年代から30年代は、通信ネットワークがアメリカの全土に張り巡らされ、アメリカ電話電信会社(AT&T)が独占企業化し、中産階級の教育を受けた女性の就職先の一つとして、電話交換手が宣伝された時代だった。第一次世界大戦後の1919年の広告では、女性交換手は、発展するアメリカを支える最先端の女性として描かれる。アメリカ全土を統合する通信ネットワークに連なることが、中産階級の働く女性のアイデンティティ確立の重要な要素として提示され、そのネットワークに連なる女性交換手は、過たずに行動し、要求された回線を正確につなぎ、その接続に余計なノイズや錯誤を挟まないようにする能力が要求される。この新たな女性の理想像から見ると、リーナは、当時の花形であった女性交換手になれるような教育を受けておらず、ノイズのないネットワークをスムーズに接続できるような女性でもない、社会の周辺に追いやられた女性であることが見えてくる。しかし、小説を読み進めると、リーナの行動とともに、人々の間を隔てる柵を前提としながらもそれを乗り越える人と人との間のローカルで個人的な交流や、モダニティの中で否定されたノイズが、むしろ新しい関係性の形成や、あるいは生命の誕生や維持につきものであることが示される。それはハートとネグリがいうところの、オルターモダン的な「対立と抵抗を超えた広がり」を持つ行為であり、リーナ

はノイズの中で子供を産み、偶然と錯誤の中で出会ったバイロンを受け入れることによって、ハートとネグリが言うところの「社会的関係ないし生命の形態のネットワークによる共有関係」を再び構築する。リーナがその結末において、トラックの外に電信柱と柵をまるでパレードのように見つめながら旅を続ける結末は、近現代化する南部の風景の中に、リーナが別の可能性を見出す能力があることを暗示している。

3. ジョーの死とリーナの延命にみるオルターモダニティの萌芽

ここまで、クリスマスとロケットのつながりに、南部を覆う近現代化が人間の生命を枯渇させる危険性が示され、リーナによって新たに作られるノイズと錯誤に満ちた小さい個人的な関係に、むしろ新しい生命を生み出し維持する能力が示されることを確認した。ここで改めて、南北戦争以前から続く南部社会の近現代化の歴史とは何だったのかを考えて、1930年代におけるクリスマスとリーナという個人の出現を歴史的に位置付けてみよう。南北戦争以前の南部社会は、一見すると、ローカルな有機的共同体として発展してきたように見える。しかし実際の南部における単一商品作物の生産とその経済活動は、実際にはヨーロッパを中心とする世界的な経済ネットワークに南部が組み入れられてゆく過程であった。南部の綿花産業は、南北戦争前からすでに世界規模の経済ネットワークに組み込まれる過程とともにあり、白人のプランテーションオーナーとなることは、この世界規模の綿花相場へ参入することに他ならなかった。南部の再建期以降の経済発展においても、南部社会の中心を占めることを自認する南部白人男性の経済活動の発想の基本にあるのは、この全国規模、あるいは世界規模の経済情報ネットワークへの参加という欲望だった。

人種的観点から見ると、クリスマスは当時のローカルな南部の人種的な偏見の犠牲となって、自分に黒人の血が入っている不安にかられ、かえって南部白人男性の一員となることへの強迫観念を持つと考えられ、彼のジョアナ殺害は、自分を黒人として疎外してきたローカルな白人社会に対する復讐行為に見える。しかし、テクノロジーとの関連からみると、ジョーは、むしろこの世界規模で広がる経済情報ネットワークに組み入れられることにあまりにもまっとうに執着しすぎたために、かえって自分がジョアナとともに作り出しつつあるオルターモダンな関係に価値を見出すことができず、その小さな関係をみずから破壊してしまったのだということが見えてくる。対照的に、リーナは小説の結末の部分で、モダニティの発展を示す電信柱のかたわらに、人々がつくりだす柵を同時に認識し、この柵によって小さく囲い込まれる複数のローカルな人々の関係が際限なく拡大してゆく通信ネットワークのかたわらに付随するのを見出す。この小説の結末では、彼女は道路交通網を走るトラック上で不安定に揺られても、自分の子供を「抱きかかえ続けられる」といい、そして、心理的な柵を思い切ったり越えて、自分との擬似家族的関係を結ぼうと再びリーナの前に現れたバイロンに対し、「誰もあなたを止めはしないわ」と言って彼を受け入れ、あらたに個人的で小さな関係を作り出す能力が自分にあることを見出す。このような視点から考えると、一見すると自分を疎外するローカルな南部社会へ激しい反逆を行うかのように見えるクリスマスは、むしろ世界規模で進むモダニティの欲望をあまりにも忠実に追求した結果、悲劇的に生命力を枯渇させて殺害される存在であると読み、また、一方で現実世界と穏やかな関係を結んでいるかのように見えるリーナの方が、その行動において、オルターモダンの萌芽とその発展を、生まれたばかりの子供とバイロンとともに示す、むしろラディカルな存在である。

結論

これまでの批評史で、『八月の光』は、しばしばフォークナーのアンチモダニティの表明と捉えられてきた。20世紀半ばのニュー・クリティシズムは、南部の都市化、工業化へ反旗を翻す反近代的農本主義の傾向を持ち、『八月の光』はその主張するアンチモダニティを読み込むにふさわしい内容を備えていると考えた。しかし、主要人物とテクノロジーの印象的なつながりを考えると、この作品のテーマは、近現代化の発展の限界を示しつつ、同時に、世界に別の可能性を見出すことだったと考えられる。ジョーは、南部の辺境においてジョアナと小さな関係を一旦形成するものの、モダニティの発展とともに広がる経済情報ネットワークへの参加に連なることに執着し、ローカルな関係の可能性を拒否してジョアナを殺してリンチされ、あたかもモダニティの追求の果てに生命の可能性を枯渇させてしまったロケットのように殺される。その一方でリーナは小さく偶然に満ちた関係性を肯定的に受け入れることで、生き延びてジェファソンを出て行く。同じオルターモダニティの萌芽を見ながら対照的な運命を歩んだクリスマスとリーナを描くことで、フォークナーは、単純なアンチモダニティにとどまらない、モダニズムの発展の中に内包された別の可能性を描こうとしていたのではないだろうか。ノイズを根絶し、世界全体を常時接続の交流で覆おうとする経済情報ネットワークが日々拡大してゆくかたわらに、ノイズと偶然性に満ちた関係性がある。その両方によって世界が成り立つことを認識することで、私たちは生命を絶えさせないモダニティの別のありようを実現できるのではないだろうか。